

大同 團結
互助 互恵

古工建友会報 50

発行人：鈴木文男 運営委員長：菅原政隆 編集部長：鈴木寛樹

建友会創立30周年

第6回
全国大会

11月に古川で開催決定

今年、古工建友会は昭和四十七年の設立から三十周年を迎えた。今秋十一月には記念の全国大会が古川市を会場に開催される。

賞金は1900名を超える！

今春の卒業生（54回生）で賞金は1900名を超えた。工業高校の単独学科のOB会で、独立施設と組織的活動をしていく会は、全国的にも稀有な存在であり、我々の誇りとするものである。

しかし、社会の急激な大変動の時代にあつて、我々を取り巻く環境は一段と厳しさを加えている。いまこそ、建友会が精神的な支柱、「大同団結・互助互恵」の心で、まず

まず親睦と結束を図っていきたいものだ。

100名を超える参加者を期待

第1回全国大会は創立7周年を記念して、昭和53年に福島県飯坂温泉（参加者70名）で開催。以降、第2回大会が宮城県鳴子温泉（100周年記念、参加者111名）、平成元年に第3回大会を宮城県松島（参加者95名）で開催した。

宮澤忠一実行委員長

（21回・仙北建設）談

実行委員会で、関東などの遠方の会員や自動車利用者も参加しやすいよう、宿泊や

全国の古工建友会会員諸君、会の設立三十周年を心から喜びたいと思ひます。

有効利用を図ってきました。しかし、国内経済状況は年を追って厳しさを加え、建友会が蓄えてきた貯財も早晚底をつこうとしています。この

建築科全卒業生をカバーしてきた従来の活動内容を、これからはどう保っていくことがなかり困難がともなうこととなりましよう。施設の維持も容易ではありません。



建友会会長
鈴木文男(5回)

創立30周年記念
第6回建友会全国大会に参りて

その後大崎をはじめ、仙台・石巻・関東・栗原・北海道に支部が誕生、工業高校単独学科としては全国的にも希な固い連帯を誇ってきました。

菊池先生が退職後の平成三年、私はバブル不況下の建友会館建設計画を断念、用地を売却しテナントとして独立事務所を移転に開設、のち現在地に移転し会員の心の故郷・連帯活動の拠点として活発に

ような経済状況の激変は想像を超えるものでありまして、運営委員会では問題の打開に苦慮しております。

第6回建友会全国大会のご案内 (30周年記念大会)

開催日：平成14年11月16日(土)
場所：ゴールデンパレス(古川)
古川市十日町 TEL0229-24-2121
費用：5000円(懇親会参加者)
参加申込：同封の返信ハガキ又はFaxにて
締め切り：平成14年9月10日

【プログラム】

記念講演 PM3:30~4:45(受付3:00~)
泉田英雄氏(25回・豊橋技術科学大学助教授)
テーマ「古工時代!就職…そして今」
大会 PM5:00~5:45
懇親会 PM6:00~8:00

【オプション】

11月16日(土) PM1:00~2:30
母校見学
母校正面玄関前に集合して下さい。

※宿泊予約 お申込により手配しております。

母校体育館改築に着手

来年1月完成予定

古工創立60周年事業として提案実施された、実習棟と校舎管理棟の改築は平成11年に完成しましたが、昭和43年より多くの古工生を迎え送り出してきた体育館は新しいキャンパス後も健在でした。その体育館も老朽化が進み、このほど改築されることになりました。完成は来年12月の予定です。

設計は、高橋伸次(11回) 高橋伸次(11回) 県内の高校では有数の広さのアリーナを持ち、更に競技中におけるケガ防止などの安全対策も考慮した施設となつていきます。充実した教育の場として、又各運動部の一層のレベルアップにも貢献できる施設であることを確信します。

設計は、高橋伸次(11回) 高橋伸次(11回) 県内の高校では有数の広さのアリーナを持ち、更に競技中におけるケガ防止などの安全対策も考慮した施設となつていきます。充実した教育の場として、又各運動部の一層のレベルアップにも貢献できる施設であることを確信します。

設計は、高橋伸次(11回) 高橋伸次(11回) 県内の高校では有数の広さのアリーナを持ち、更に競技中におけるケガ防止などの安全対策も考慮した施設となつていきます。充実した教育の場として、又各運動部の一層のレベルアップにも貢献できる施設であることを確信します。



1階：武道館 2階：アリーナ 延床面積：2304.35㎡

古工建友会eメールアドレス

kenyuka@gaea.ocn.ne.jp

丁定規



▼「定年前線」は12回生あたりを通過中。いまどきの六十歳は心身ともにいまだ壮年。第二の職場に就く方も多いと思うが、やはり心のかゆさで張りつめていた心かゆさでいるはず。先はまだ長い。あなたは有難義な余生を送る手だてをお持ちですか? 気が引けるが自分ごとを少し。教師となりたてのころ、私は仕事こそこつこつやり始めたころ、最初にやめたのが「登山」であった。夏山専門であったが、休みはクラブや補習などで時間が取れなくなつたのである。次に見送つたのが「写真」。メカニクアで戦後続々と誕生した新型を追いかけ、現像まですべて手がけていた。登山は時間を必要とし、カメラの費用は馬鹿にならなかつた。こうして今もからうじて続けて。このころ、少年時代から始めた「切手収集」と「短歌」。短歌は白秋の弟子であった先生が病気で倒れ、むかには会員三千人ほどの歌誌を継がされた。五十数歳のごころである。その時はエライことになつたと思つたが、やがて退職後の精神的な支えとなつた。もう一つは退職とともに引退した建友会の新しい事務所の立ち上げにぜひ協力を、という会長の依頼に、言ひだした。私の私生活は、言ひだした。お手伝ひに続けています。こんなわけです。いま、二十人の建友会員と、会員が二百人ほどに増えた短歌誌の主宰という、身の丈を越す仕事をつつも抱えて、現役時代よりも忙し日々を送っている。が、人に些かながら頼られる生活を送ることに、心から感謝している。▼どうやら余生の充実の秘訣は、現役時代に培つて置かねばならないようであらう。切手? これはもう、生きているうちには整理は不可能です! K